

# エコたま グリーンNEWS



多摩市民環境会議機関紙 第 135 号(通巻第 195 号) 2014 年 10 月 9 日発行 発行人: 清水武志朗  
編集人: 井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山複合施設 301(事務局員は常駐しております) e-mail qqh43td@train.ocn.ne.jp  
URL <http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp>

## 多摩川にカヌー漕艇の歓声!



カヌー(手前)とEボート 乗る人数が違う ヤック)とEボートを漕艇する体験を行った。今年6月にも予定されていたが、直前の降雨によって川が増水し、断念されていた。

この催しは9月27~28日に行われ、実際には府中市に本拠を置くNPOの「あばれんぼキャンプ」が運営し、用具の持ち込みから、参加者への指導まで行っている。多摩市サイドの水辺の楽校スタッフは受け付けや艇に乗る際の世話、水中の安全確保などを担当。

両日の午前と午後、各50人ずつが参加し計200人となることだったが、若干の当日キャンセル者が出た。参加した子どもたちは全員、ライフジャケットを身につけ、インストラクターたちから股のあいだまでベルトを通して固定しているかをチェックされる。

これがちゃんと行われていないと、いざという時に、インストラクターがライフジャケットの肩の部分をつかんでも、子どものからだはジャケットをくぐり抜けて流れて行ってしまうからだ。

カヌーとEボートにそれぞれ乗る前に、漕艇のための予行練習をする。カヌーは左右に水かきのついた長いアルミ製のパドル、Eボートはカヌーより短い木製のパドルで、10人強で同じ方向に向かって一斉に漕ぐ。東京ディズニーランドの船で漕いだ経験のある人もいだろう。ディズニーランドとは、ボートの材質が強化ゴム製に代わっているだけ、漕ぎ方は一緒だ。

さて、万全の準備をして一ノ宮公園のコンクリート斜面から出発したEボートは、これまでのように上流スタート前に入念な指導が行われる



一ノ宮公園前の多摩川が子どもたちの歓声に包まれた。多摩市水辺の楽校が主催する<多摩川カヌー体験教室>に2日間で200人近い小中学生が参加し、カヌー(カ

ヤック)とEボートを漕艇する体験を行った。今年6月にも予定されていたが、直前の降雨によって川が増水し、断念されていた。

この催しは9月27~28日に行われ、実際には府中市に本拠を置くNPOの「あばれんぼキャンプ」が運営し、用具の持ち込みから、参加者への指導まで行っている。多摩市サイドの水辺の楽校スタッフは受け付けや艇に乗る際の世話、水中の安全確保などを担当。

両日の午前と午後、各50人ずつが参加し計200人となることだったが、若干の当日キャンセル者が出た。参加した子どもたちは全員、ライフジャケットを身につけ、インストラクターたちから股のあいだまでベルトを通して固定しているかをチェックされる。

これがちゃんと行われていないと、いざという時に、インストラクターがライフジャケットの肩の部分をつかんでも、子どものからだはジャケットをくぐり抜けて流れて行ってしまふからだ。

カヌーとEボートにそれぞれ乗る前に、漕艇のための予行練習をする。カヌーは左右に水かきのついた長いアルミ製のパドル、Eボートはカヌーより短い木製のパドルで、10人強で同じ方向に向かって一斉に漕ぐ。東京ディズニーランドの船で漕いだ経験のある人もいだろう。ディズニーランドとは、ボートの材質が強化ゴム製に代わっているだけ、漕ぎ方は一緒だ。

さて、万全の準備をして一ノ宮公園のコンクリート斜面から出発したEボートは、これまでのように上流スタート前に入念な指導が行われる

の四谷橋を目指すことなく、対岸の府中市側の水辺に到着すると、ガサガサをして周辺に棲む魚類などの生物を収集。みんなですんなり生物がいるか

を調査。外来種もいた。

かたやカヌーは、この日は風がやや強かったせいか、風下のたまりに吹き寄せられるようなケースも出て、な



川の各所に安全を監視するスタッフがかなか川の中流域まで漕ぎ進むようなクルーはいなかった。おかげで多摩川本流の強い流れに流されるような場面も皆無で、安全面では安心して見ていられた。

ボートをおりた子たちからは、「楽しかった、また次回も参加したい」という声が大勢を占めており、“親水”という面では大きな効果があったようだ。

## 一ノ宮用水の生態系は回復が加速

市内一ノ宮1丁目の真明寺裏を流れる一ノ宮用水(日野の程久保川から引いた農業用水路)の川岸が崩れそうになっていたため、それを修理する際になるべく自然が保護されるよ



うな工法で行われるようにした。工事は木の杭を打った岸辺をつくったり、水路内に植物を植えるなど自然の保全を配慮する手法で行われた。

そして、この生態系を工事前(昨年11月)と工事後(今年4月)、そして工事後の調査から5カ月後はどうなっていたかと、3回目の生物調査が9月27日午後、現地で行われた。

調査の主体はこれまでと同じ東京農工大講師の西田一也先生。27日はこれに地元のボランティア10人ほどが集まり、調査に協力した。

調査の場所と手法はこれまでのやり方を踏襲し、場所は工事で新設されたコンクリート板でできた橋の下流と上流、そしてさらに



上流のカーブ地点を含む3カ所。ひとつの調査場所の長さは20m、この上端部と下端部を網で仕切り、そのなかで3人の調査員が足でガサガサをやりながら生

物(魚)を捕捉。それをあとから記録する。今回の調査では、ギンブナ、タモロコ、オイカワ、コイ、ドジョウ、エビ類、ザリガニ、シオカラトンボのヤゴなどが捕獲されたが、4月の工事終了直後とは比較にならぬほどの“大漁”。とくに11月の調査でも多かったギンブナがたくさんとれ、ほぼ完全に工事前の自然が復活していることが印象づけられた。

橋の下にはここに棲む生物たちが越冬しやすいような配慮も行われているので、今回の水路改修工事がいかに自然にとって迷惑なものではなく、有用なものであったか時を追って明らかになっていくことだろう。今後の西田氏の報告書の発表を待ちたい。



→これで途中段階の漁獲

## 多摩中でCRD行わる



橋脚に沿って積まれたごみを処分  
の大川に行き、清掃するもの。

450人の生徒が3年生は関戸橋の上流、2年生がその下流、そして1年生は大川を担当する。

各自レジ袋やトングを持った生徒たちが河原に行き、見たものは、関戸橋の橋脚沿いに人為的にうず高く積まれたごみの山。見て見ぬふりをするわけにもいかないということだろう、リーダーとおぼしき男子生徒が「あのごみを全部拾っていく」と声をかけていた。むろんレジ袋などには入りきれない。

一方、1年生たちは大川の川底に敷かれたタイル板などをデッキブラシでこすってタイルにこびりついた泥や藻類をきれいに取り去ったり、川周辺のごみ掃除をした。



大川でもこの通り人海作戦で清掃

市立多摩中学校では10月3日午後、生徒会の主催によるCRD(クリーン・リバー・デー)が開かれた。これは毎年この時期に、全校生徒が運動着に着替えて、多摩川の河原やすぐ前

最後はボランティア袋約30袋分のごみが回収され、年1回とはいえ多摩川や大川の清掃がいかにか、生徒たちの心に刻みつけていた。

## 黄色と白のヒガンバナ見つけ



上は回向院内の黄色、左は白



秋はヒガンバナの季節。「曼珠沙華(まんじゅしゃげ、またはまんじゅしゃか)」とも呼ばれるヒガンバナは、ヒガバナ科ヒガンバナ属の多年草。普通の色はご存知のとおり赤だが、今秋初めて黄色や白色のヒガンバナも見たのでお知らせしよう。

黄色のものは両国の回向(えこう)院境内で。ここには怪盗・鼠小僧次郎吉の墓もあるが、その近くに咲いていた。

当会議の成川貞子さんによると、黄色は明治期などに外国から渡ってきたものかどうか。だから、回向院でも大事に(自慢げに?)植えられていたのか。

そして白はアルビノといって、突然変異で色素の抜けた種だという。これは聖ヶ丘団地のなかに咲いていた。



中国には種で増えるヒガンバナがあるそうだが、日本のものは球根で増える(栄養繁殖)種とのこと。この球根は昔から飢饉などの時の非

常食にもなっていた。むろん、少し毒抜きする必要があるが、食べられる。さえずりの森内に咲くキツネノカミソリやユリも仲間だそうだ。

## エネカフェで各団体、活発に事例発表

10月4日に永山ハウスで開かれた「エネカフェ」は、地元の多摩電力(たまでん)のほかに、川崎、八王子などの団体が参加し、活発に事例発表を行ってくれた。



川崎は、NPO法人原発ゼロ市民共同かわさき発電所という。三枝信子(右写真)さんが発表してくれた。

名前からもわかるように、脱原発の運動を行っていたが、それだけでは何も変わらないと、両輪の一つとして再生可能エネルギー問題を考え、発信していく組織として昨年夏ごろ生まれた。

団体の年齢層は30~40代が多く、学生や主婦もいる。1号発電所は元住吉のマンション屋上に設置した25kWの太陽電池。出資してくれた人たちには、売電費用は①自然エネの普及、②原発ゼロを目指す活動資金に使うので、一切のリターンはありませんと集めたという。

団体名に「原発ゼロ」がついていることに、「金融機関がおカネを貸してくれないよ」など懸念する声もあった。しかし、この団体そのものが反原発で立ち上がったのだから、原点を忘れないようにと残したのだとか。

5つほどの部会があるが、そのなかのアート部で現在プロモーションビデオを制作中という。市民によるエネルギー革命、エネルギーを自分たちの手に取り戻そうと、まさにいま勢いのある旬な団体だった。

八王子の団体は、一般社団法人八王子協同エネルギー。こちらは共同代表の田中拓哉さん(写真の左)が発表してくれた。



堀之内にある鈴木(おっさん)牧場の堆肥小屋の波型屋根に29.8kWのパネルを設置した。たまでんの恵泉女学園のパネルが30kWだからほぼ同規模ということになる。1kWあたり23万円という安さで設置でき、発電コストは約22円/kW。その東電の買い取り価格は36円(同)。

こちら11年3月の福島第一原発の事故後、「原発のいない社会づくり、原発に頼らないエネルギーづくり」をテーマに取り組みむようになった。八王子という地域の気候や資源を知り、その地域の特性に合った自然エネルギーをつくりだそう、大規模システムではなく小規模分散型であり、地域の自治や自立をめざそうといった考えがベース。地域に生きる意味の再発見という側面もある。

市民発電所は災害時にも独自の電源があるから有効だし、蓄電池も併用すればさらに「持続可能」な領域が増える。さらに、ここでは市民放射能測定室「ハカルワカル広場」や、福島の親子を招いての交流合宿「福島こども支援・八王子」なども行っている。(次号につづく)

